

専門家と云われる人の第一条件

地域の小学校に通学する障害のあるお子さんのことを、以前当HP「充実した毎日を過ごす親子に拍手（バックナンバー福祉・教育・医療関係P 2003/10/23/：参照）にも記載しましたが、最近の様子をお母さんからメ-ル（抜粋）でいただきました。

【春らしい日が続き毎日気持ちよく登校しています。今年度から看護師配置が一日増え週3回になったこと、校内外人事異動で、子の教育環境が大きく変わりました。全て前向きな取り組みだと思い感謝しています。

子も昨年一年間でたくさんのお子さんのことを学びました。（具体的に詳細にお子さんの変化の様子の記載 - 省略 - ）。

何よりも「学校へ通う」ことへの本人の強い意欲が感じられます。もしかしたら、お勉強より大好きなお友達と遊ぶことを期待しているのかもしれないね。それも年齢に応じた正直な気持ちでしょうね。

一年間、学校の内部が他の保護者より見えました。校長、教頭、協力学級、担任のそれぞれが、立場は違えども教育者として、精一杯ご尽力いただきました。期待以上の取り組みに頭が下がります。もちろん、障害児教育が専門でない方が多く、子のような症状の子と接するのは初めてだとおっしゃる方もいました。

今年度で特殊学級と協力学級の支援体制が模索され、更にどちらの子供にも違和感の無い、より良い教育環境が小内で整備されて行くことを期待しています。】

こうしたメ-ルを目にすると、教師もそれなりの勉強は必要でしょうが、現場では、特殊教育だなんだと分ける必要はないのでしょうか。いい動きを引き出したのは親御さん、お母さんの子ちゃんによかれという気持、がんばりですね。小学校という場では、いい流れができています。

案外、専門知識を知ったかぶりする専門家集団より、あまり知らない先生の方が、学ぼう、共に歩もうとする姿勢、また、学校全体でその取り組みを支えようとする姿勢がある方が、いい傾向が現れますね。

そうした意味で、私は、障害児教育に「まず専門家、ありき」とは思いません。障害のある子どもや家族と共に歩んでくださる姿勢のある先生方の存在こそが、専門家といわれる人の第一条件と思います。そのことを再認識させられた、お母さんからのメ-ルでした。

（2004年04月16日記）